

# アスパラガス（普通、立茎）

## 栽培暦

作型	年次	月	1～2	3	4	5	6	7	8	9	10	11～12
露地普通	初年度		は種 ————— 定植 —————									
	2年目		<div>収穫</div>									
	3年目以降		<div></div>									
雨除け 立茎栽培	初年度		————— —————									
	2年目以降		<div></div>									

## 栽培の特徴とポイント

定植して10年以上安定的に収穫するには、定植時の徹底した土づくりが重要である。

露地普通栽培では、茎枯病の耕種的防除及び薬剤防除の徹底が収量の安定及び収穫年数の延長を図るポイントとなる。雨除けは茎枯病の確実な防止効果があり、立茎栽培と合わせて1t以上の多収穫を狙える栽培方法である。ただし、初期投資がかかること、雨除け内が高温乾燥となりスリップスが多発生しやすいこと、夏期に障害茎が発生しやすいこと等に対する対策が必要である。

## 品 種

メリーワシントン 500W：萌芽勢はさほど強くないが、比較的病害に強く、安定した品種である。

（固定種）

スーパーウェルカム（サカタ）：萌芽勢が強く豊産性であるが、収穫しすぎると急に萌芽なくなり、土壤病害の発生や株絶えとなりやすい。このため、露地普通栽培では収穫の打ち切り時期に注意が必要である。

## 育苗管理

### 1 播 種

#### 1)時 期

次年度から収穫を上げるためには、ハウス内の温床で2月上旬に播種すると生育量が確保できる。4月以降に播種する場合は、無加温でもよいが、生育量がとれないことから、翌年は露地普通栽培では収穫しないか収穫期間を短くし、立茎栽培では茎葉が一定量確保できてから収穫を開始する。

#### 2)播種床の準備

安全を考慮して床土は園芸用育苗床土を用いる。育苗床は園芸用育苗箱や水稻育苗箱を利用する。

#### 3)種子準備と播種

10a当たり1dl程度の種子を用意し、3～4日間水に浸漬してから、2×4cm程度に条まきする。

### 2 育苗管理

加温装置やトンネル等を使用して温度を日中25℃程度、夜温12℃以上を確保する。かん水は床土の上が乾かない程度とする。

### 3 鉢上げ

茎が2～3本伸び、擬葉が展葉する前に鉢上げを行う。ポットは3寸、用土は消毒した田土1m<sup>3</sup>を準備し、表の肥料を均一に混合する。pH6.5、EC0.4～0.6を基準とする。田土1m<sup>3</sup>で本ば20a分の苗の用土となる。

（kg/田土1m<sup>3</sup>）

肥 料 名	施肥量
完 熟 堆 肥	200
苦 土 石 灰	1.5
過 燐 酸 石 灰	0.5
化 成 肥 料	1.0

#### 4 鉢上げ後の管理

育苗期間が3ヶ月以上あるので、適宜液肥をかん水代わりに施用する。化成肥料として基肥一発肥料を使用したら追肥はいらず省力的である。定植が近づいたら、しおれない程度にかん水を控えて、ほ場へ出す準備をする。

### 本ば管理

#### 1 ほ場の選定

アスパラガスの根は1m以上伸びるので、この根を十分に張らせることがその後の生育収量に大きく影響する。このため、肥沃でできるだけ作土があり、排水のよいほ場を選ぶ。

#### 2 堆肥散布及び深耕

全層に施用する分の堆肥や肥料を散布し、深耕ローター等でできるだけ深く耕起する。次に定植畝となる部分を管理機等でできるだけ深く割り返し、溝施用分の堆肥や肥料を割り返した溝に施用し、再度耕起して埋め戻す。

#### 3 施肥

##### 定植時の施肥基準

(kg/107-ℓ)

肥料名	総量	基 肥		成分量		
		全 層	植え溝	N	P	K
完 熟 堆 肥	10 t	6 t	4 t			
苦 土 石 灰	180	120	60			
熔 燐	120	60	60		24.0	
有 機 肥 料	80	80		4.8	4.8	4.8
基肥一発肥料	60	60		8.4	8.4	8.4
合 計				13.2	37.2	13.2

定植年の生育後半に肥切れの兆候がある場合は、ポリマルチをしていることから、液肥10倍液100cc/株を灌注機で1~2回土中に追肥する。

有機肥料：フワ-有機

基肥一発肥料：果さい一発

##### 2年目以降の施肥基準

(kg/107-ℓ)

肥料名	総量	基肥	追 肥		成分量		
			1回目	2回目	N	P	K
完 熟 堆 肥	3 t	3 t					
苦 土 石 灰	100	100					
熔 燐	60	60				12.0	
フワ-有機	200	80	60	60	12.0	12.0	12.0
果さい一発	120	45	45	30	16.8	16.8	16.8
合計					28.8	40.8	28.8

追肥1回目  
融雪後

追肥2回目  
収穫打切前

#### 4 雨除け施設の設置

立茎栽培する場合は、パイプハウスとするか、図のような簡易な雨除け施設を設置する。

#### 5 定植

##### 1) 定植時期

6月(ポットに根が回り過ぎない内に定植する。)

##### 2) 栽植方法

畝幅2.0~2.1m×株間30~40cm×1条植え  
=1,200~1,500株/10a

畝幅は2m以上とった方が生育中の管理作業がやりやすい。

##### 3) 畝立て、マルチング

ほ場の排水性に応じて25cm以上の高さの畝を作

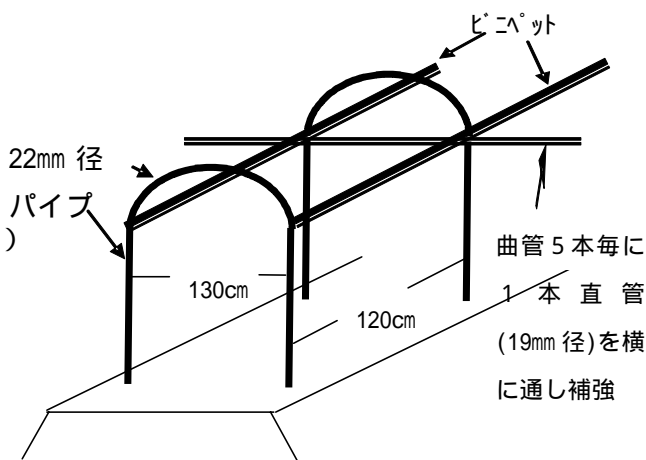
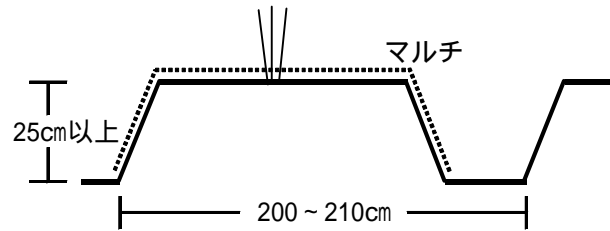


図 簡易雨除け施設の構造

り定植年だけは、除草の省力化や乾燥防止のため黒ポリでマルチする。排水溝をきちんと作り、畝溝をしっかりとつないでおく。



## 6 茎葉の管理

### 1)倒伏防止

株の両側に3～4段に紐を張り、株が倒伏しないようにする。露地普通栽培では畝上に4～5m間隔でアーチパイプを設置して紐を張るとよい。

### 2)適正な茎葉量の維持

L規格の小さめまたはM規格の大きめの茎を株当たり4～6本(1m当たり15～20本)仕立て、過繁茂にならないように細茎や障害茎を間引いて管理する。

### 3)摘心

茎葉が伸び過ぎると倒伏しやすくなることから、140～160cm程度で先を摘み取る。これ以下だと側枝が伸びすぎること、繁茂量が足りなくなること等から140cm以下とはしない。

### 4)下葉の刈り取り

立茎栽培では、茎葉が繁茂してくると株元が暗くなり、収穫茎の緑色が薄くなるので、株元に光が当たるように、生育中期に1～2回、日陰を作る下葉を右図のように切除する。

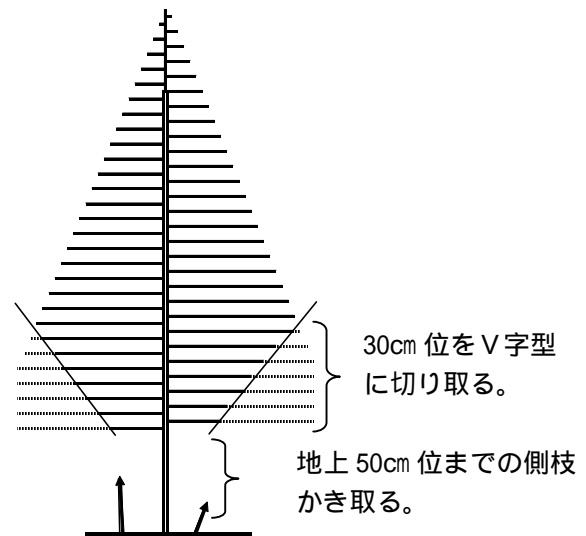


図 下葉刈り取りのイメージ

## 7 乾燥、高温対策

晴天が続けば場が乾燥したら3～5日に1回の割合で積極的に畝間かん水する。また、パイプハウスでの栽培では、夏期の高温で呼吸量が多くなり、萌芽してくる若茎の頂部が収穫前に開いたり、内部が空洞になり曲がったりするものが多くなる。そのため、ハウスを遮光資材で被覆したり、石灰乳をハウスピニールの表面に散布する等でハウス内気温を下げるようにする。

## 8 茎葉刈り取りと残渣処理

11～12月となって茎葉が黄変してから草刈り機で茎元からできるだけ茎を残さないように刈り取り、ほ場外へ搬出して焼却する。定植年のマルチは野鼠の越冬地にならないよう、降雪前には取り除く。また、残渣が残っていると翌年の病害の原因になるので、処分する。残った株の内部でも病原菌が越冬するので、翌春の萌芽前までにバーナーで株元を中心に畝の上を焼却する。

## 病虫害防除

茎枯病：前年茎で越冬し、春先の萌芽時に感染し、生長に伴って蔓延する。雨除けすることで発生はほぼ防げるが、露地では秋の刈り取り茎をほ場から搬出し、焼却すること、堆肥で地表面を覆うこと等の耕種的防除に合わせ、萌芽時を中心に降雨時の薬剤防除の徹底が重要である。

スリップス：雨除けした場合に茎葉が高温、乾燥となることから発生が多くなる。発生も露地より早くなることから、5月下旬頃から叩き落とし調査で発生量を確認しながら、発生密度が高くなる前に薬剤防除を徹底する。

疫病、株腐病：いずれも根や地下茎を侵し株絶えの原因となる。ほ場を過湿、過乾にしないことを始め、過度に収穫しないことや茎枯病の防除を徹底して、株を弱らせないことが大切である。

## 収 穫

萌芽茎が 30cm 程度の長さになったら地際から切り取り、収穫する。高温期は 1 日 2 回収穫する。傷、曲がり等の障害茎を除いて、25cm に切り揃えて規格別に選別し、100g 結束やバラ 1 kg 詰め等の荷姿で出荷する。鮮度が落ちやすいので、速やかに予冷する。

露地普通栽培で春どりする場合、5 月上旬が収穫のピークでその後漸減するが、収穫打ち切りが遅れないよう、L 以上比率：3 割以下、1 日の収穫量：最高時の 3 割以下等を目安とする。年次別の収穫日数の目安は右表のとおりである。

収穫年数	収穫日数
1 年目	15 ～ 20 日間
2 年目	20 ～ 30 日間
3 年目以降	50 ～ 60 日間

立茎栽培の場合は、1～2 週間収穫した後に、一旦収穫を打ち切って茎葉を 5～6 本仕立て、その後、萌芽してくるものを秋になって萌芽しなくなるまで収穫する。株の力がないものは、最初に萌芽した茎をそのまま 5～6 仕立てから収穫を始めるとよい。

## 販売のポイント

一般には規格別に 100 g に結束して 40 束( 2 L は 35 束)をダンボールに詰め、市場へ出荷するが、保冷パックに 1 kg バラ詰めとして贈答用に直売すると付加価値販売が可能である。立茎栽培では販売期間が長期にわたることから確実な販路確保が大切である。